

SUPPLEMENT TO GENES GENET. SYST. (2008)83(2) April 2008

GSJ コミュニケーションズ

PROCEEDINGS OF THE SOCIETY



GENETICS SOCIETY OF JAPAN (GSJ)

◆創立1920年◆

日本遺伝学会 inc

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/gsj3/index.html>



目 次

頁

大会ニュース（その2）日本遺伝学会第80回大会案内	3
会長からのメッセージ：その2 品川日出夫	10
惜別：飯野徹雄先生のご逝去を悼む 米田好文	13
第9回遺伝学談話会 山本博章	15
第10回遺伝学談話会 山本博章	16
シンポジウムの案内 第18回 酵母合同シンポジウム 「酵母の挑戦 ～生命現象の包括的理解と応用に向けて～」	17
平成20年度化学素材研究開発振興財団記念基金 「グラント」研究奨励金候補者募集	17
第25回（平成20年度）持田記念学術賞候補者推薦依頼について	18
第25回（平成20年度）井上学術賞受賞候補者の推薦について	19
加藤記念バイオサイエンス研究振興財団国際交流助成について	20
本 会 記 事	22

日本遺伝学会第80回大会案内

2008年4月23日

2008年の第80回大会は、名古屋大学工学部 IB 電子情報館を会場に、下記のような企画で準備を進めています。多くの方々の参加をお待ちしております。

大会ホームページ (<http://bunshi4.bio.nagoya-u.ac.jp/~iden80/index.html>) では、より詳細な最新の情報をご覧いただけます。ランチョンセミナー、機器・試薬等展示、広告掲載についての詳細は大会ホームページに掲載予定です。

第80回大会では学生の参加を歓迎するため、演者として事前登録した学生会員の参加費は無料とし、旅費の一部援助も行います。また、優れた発表はベストペーパー賞として表彰いたします。

1. 会 場：名古屋大学工学部 IB 電子情報館（名古屋市中種区不老町）
2. 会 期：2008年9月3日(水)・4日(木)・5日(金)
なお、市民公開講座を9月5日(金) 17:30-20:00に予定しています（後述）。
3. 企 画：
 - (1) 一般講演（9月3日(水), 4日(木), 5日(金) 各日 9:00-12:00）
講演時間は1題につき15分（発表12分, 質問3分）を予定しています。PC用プロジェクター機材のみを用意しますので、各自発表用PCをご持参下さい。
 - (2) 国際シンポジウム「Systems and Networks」
名古屋大学 GCOE プログラム「システム生命科学の展開」共催
※国際シンポジウムは、非学会員の学生・院生も無料で傍聴できます。
大会1日目 9月3日(水) 13:00-17:00
講演予定者
 - 1) Judith Armitage (University of Oxford)
<http://www.bioch.ox.ac.uk/aspsite/research/brochure/Armitage/>
 - 2) Paul Sternberg (California Institute of Technology)
<http://biology.caltech.edu/Members/Sternberg>
 - 3) Michael Freeling (University of California, Berkeley)
<http://epmb.berkeley.edu/facPage/dispFP.php?I=10>
 - 4) Makoto Matsuoka (Nagoya University)
<http://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~naikan/>
 - 5) Takao Kondo (Nagoya University)
<http://www.bio.nagoya-u.ac.jp/english/seminar/b1E.html>
 - (3) ワークショップ
大会2日目 9月4日(木) 13:00-17:00, 大会3日目 9月5日(金) 13:30-15:30
ワークショップは以下の12テーマを予定しています。タイトルとオーガナイザーは以下の通りです。
各企画の詳細な日時と内容は、随時、大会ホームページに掲載いたします。
 - 1) 「遺伝子進化は実験的に可能か?—その基盤的現象を探る—」
世話人：中別府雄作（九大・生医研）、堀内 嵩（基生研）
演 者：中別府雄作（九大・生医研）、木下和生（滋賀県立成人病センター研究所）、渡邊孝明（基生研）、真木寿治（奈良先端大）、児玉顕一（基生研）

2) 「転移因子, RNA サイレンシング, 進化」

世話人: 塩見春彦 (慶応大)

演者: 佐々木裕之 (遺伝研), 岡田典弘 (東工大), 佐藤 豊 (名大), 塩見春彦 (慶応大)

内容: ヒトゲノムの場合, 全体の約45%が転移因子 (transposable elements; TEs) 及びその‘残骸’で占められている。このような TEs は, 最近まで, ジャンクや利己的 DNA と見なされ, 宿主にとって無駄で役に立たないもの, さらにはむしろ害を与えるものと捉えられてきた。しかし, 近年のゲノム解析から, TEsこそがゲノム進化の主役であり, 宿主と TE との間の軍備拡張競争 (‘arms race’) の結果がゲノムを形づくって来たことが明らかになりつつある。この軍備競争の宿主側の重要な ‘arms’ が「RNA サイレンシング」である。つまり, TEs と RNA サイレンシング機構の間の ‘軍備競争’ が複雑な遺伝子発現制御を可能にするゲノムの進化をもたらしたという新しいコンセプトが生まれてきた。このコンセプトをいろいろな角度から議論する。

3) 「染色体機能と DNA トランスアクション」

世話人: 小林武彦 (遺伝研), 篠原 彰 (阪大・蛋白研)

演者: 小林武彦 (遺伝研), 篠原 彰 (阪大・蛋白研), 岩崎博史 (横浜市大), 太田邦史 (東大)

内容: DNA 複製, 修復, 組換えは, 遺伝情報の正確な継承に重要である。これら3つの反応が互いに連係していることはよく知られているが, その連係の分子機構についてはまだ不明な点が多い。従来は DNA 上の反応として知られて来た DNA 複製, 修復, 組換えは, 染色体の機能と共役するにより特殊化され, 機能的に分化し多様性が生み出されていることが近年明らかになってきた。本ワークショップでは, DNA トランスアクションとしての DNA 複製, 修復, 組換えの仕組みを俯瞰しつつ, それらの連係, 染色体機能との相関について最新の知見を議論する。一般演題から4-5名の発表者を募る予定である。

4) 「生物時計研究の展開」

世話人: 石浦正寛 (名大・遺伝子), 吉村 崇 (名大・農)

演者: 水野 猛 (名大・農), 近藤孝男 (名大・理), 吉村 崇 (名大・農), 松尾拓哉/石浦正寛 (名大・遺伝子), 海老原史樹文 (名大・農)

5) 「植物のエピジェネティクス」

世話人: 木下 哲 (奈良先端大), 長岐清孝 (岡山大)

演者: 木下 哲 (奈良先端大), 佐瀬英俊 (遺伝研), 長岐清孝 (岡山大), 那須田周平 (京大・農), 星野 敦 (基生研)

6) 「植物の環境適応と生存戦略」

世話人: 芦荻基行 (名大)

演者: 馬建鋒 (岡山大: 植物の栄養吸収性と環境適応), 芦荻基行 (名大: 植物の不良環境適応), 東山哲也 (名大: 植物の受精競争と生存戦略), 今泉温子 (植物-微生物共生進化)

内容: 子孫を残す, これは生物にとって逃れられない“性”であり“定”である。生物は多種多様な生存戦略を模索し, そしてより多く, より確実に子孫を確実に残す戦略を獲得してきた。生物は今なお, 追いつ追われつつの見えない過酷な競争を繰り返している。また, 「生息地の拡大」は生物にとって“子孫繁栄”の重要なファクターである。特に移動することの出来ない植物は, 新しい環境, 過酷な環境に適応するために不良環境を克服する何らかの機能を獲得しなければならない。植物は地球上の様々な過酷環境に適応し, 生物多様性 (Biodiversity) を構築してきたが, これは Natural variation (自然変異) の選択と淘汰の結果である。近年の分子生物学の進歩により, 植物の生存戦略や環境適応といったフィールドに分子レベルでのメスを入れることが可能になってきた。本ワーク

ショップでは、植物の生存戦略や環境適応性研究にユニークな手法でかつ最先端の研究を行っている研究者に最近の話題を提供してもらう。

7) 「集団遺伝学の理論とその応用」

世話人：田嶋文生（東大）、印南秀樹（総研大）、高橋 亮（理研）

演 者：未定

8) 「行動をつかさどる神経活動」

世話人：久原 篤（名大・理）、小田洋一（名大・理）

演 者：飯野雄一（東大・理）、木村賢一（北海道教育大）、東島真一（生理研）、和多和宏（北大）、他1名

内 容：動物の行動を制御する脳神経回路網を理解するためには、神経回路の構成を明らかにするとともにその回路がどのように働かという回路機能の研究が重要である。現在までに、モデル動物において、既存の分子遺伝学や電気生理学や実験心理学的解析から、神経回路の動態を分子レベルから行動レベルまで結びつけ解析することが可能となってきた。さらに近年、最新の神経活動の光イメージングや人工的な神経活動操作（チャンネルロドプシン等）や、マイクロアレイ等の遺伝子発現測定技術を利用することにより、これまで捉えることのできなかった神経回路の性質が発見されてきている。本ワークショップでは、ソングバード、ゼブラフィッシュ、ショウジョウバエ、線虫を使って、動物行動に関わる神経機能に関してどのような研究が進められているのか、また、将来、どのように進んでいくのかについて、これらの分野の最前線で研究をされている先生方に講演をしていただく。異なるモデル動物には、異なるユニークな実験アプローチが存在する。従って、異分野交流という意味でも、このワークショップの意義は大きいと考える。

9) 「脳・精神・文化一人の進化との関わり」

世話人：颯田葉子（総研大）

演 者：村山美穂（岐阜大）、小野勝彦（生理研）、青木健一（東大・理）

10) 「組換え DNA 実験の安全性を考える：飯野徹雄先生追悼ワークショップ」

世話人：本間道夫（名大・理）、米田好文（東大・理）

演 者：人選中（文部省ライフサイエンス課：組み換え DNA の安全指針について）、鎌田 博（筑波大：組み換え植物の安全性）、小幡裕一（理研バイオリソースセンター：組み換え動物の安全性）、竹内 薫（筑波大：遺伝子治療の安全性）、武部 啓（近畿大：遺伝子解析の推進を守る生命倫理）

内 容：組み換え DNA 実験技術も定着し、組み換え微生物体の応用や、植物や動物においても組み換え体が実験室を飛び出して、社会の中に出回るようになった。大きな話題となっている幹細胞研究も、組み換え DNA 技術なしには成り立たない。このような背景のもとで、組み換え DNA によって作られた新しい生命体の安全性、あるいは、この技術によって神の領域に入ったことに由来する新しい生命倫理を考える機会を作りたいと、このワークショップを企画した。このワークショップの企画をしている途中で、元遺伝学会会長で、日本の組み換え DNA 実験指針作りに大きな関与をされた飯野徹雄先生が逝去されました。追悼の意も込めたワークショップとしたいと思います。

11) 「遺伝学と日本遺伝学会の将来に向けて」

世話人：武田 穰（名大・産学官連携）

演 者：森脇和郎（元遺伝学会会長、理研・バイオリソース）、常脇恒一郎（元遺伝学会会長）、関口睦夫（元遺伝学会会長、九州歯科大）、他1名予定

12) 「優れた遺伝学の芽を皆でサポートするために」

世話人：松浦悦子（お茶大・理）

演者：未定

(4) 公開市民講座 ※入場無料 9月5日(金) 17:30-20:00

<市民講座の概要>

本市民講座では、まず、第1部として、国際的に顕著な業績をあげられている遺伝学者3名に、遺伝学の最先端研究の講演をしていただく。第2部として、高校生に対する遺伝学教育に携わる高校教諭や、遺伝学教育の進展を社会に伝えるメディア関係者などに加わっていただき、それぞれの立場から、「現代社会における遺伝学教育のあり方」に関して、わかりやすく、意見や取り組みについて語っていただき、パネル討論会を開催する。本市民講座に参加される一般聴衆からの質問に対しても専門家の立場から回答することも積極的に行う。

第1部：最先端遺伝学者による講演

- (1) 池村 淑道（長浜バイオ大学教授・国立遺伝学研究所名誉教授・総合研究大学院大学名誉教授）
「ゲノム配列に潜む生物種による特徴をコンピュータで探る」
- (2) 小原 雄治（国立遺伝学研究所所長）
「発生において細胞の運命はどのように決まるのか？」
- (3) 川岸 郁朗（法政大学教授）
「細胞はどのようにして外界からの刺激に応答するのか？」

第2部：パネル討論会「遺伝学教育を考える」

コーディネーター

- ・川岸 郁朗（法政大学教授）
話題提供：大学で教えるべき基礎遺伝学とは？

パネリスト

- ・池村 淑道（長浜バイオ大学教授・国立遺伝学研究所名誉教授・総合研究大学院大学名誉教授）
話題提供：ゲノム進化学・生命情報科学の立場から
- ・小原 雄治（国立遺伝学研究所所長）
話題提供：ゲノム科学者の立場から
- ・伊藤 政夫（名古屋市立向陽高校教諭）西郷 孝（愛知県立旭丘高校教諭）
話題提供：高校生は遺伝子操作や遺伝子組換えをどう考えているか？
- ・今津 博文（読売新聞科学部記者）
話題提供：最先端の遺伝学教育を伝える立場から
- ・池内 達郎（日本遺伝学会「遺伝学の教育と普及に関する特別委員会」）
話題提供：「ヒトの遺伝」を教育現場に

<市民公開講座の目的>

ゲノム時代が到来し、遺伝学を中心として、生命科学の分野は急速に進展しており、最近では、この分野から、ノーベル医学・生理学賞者を頻繁に輩出しているといっても過言ではありません。現代社会において、人々は日常的に遺伝子という言葉を使って語り始めましたが、本当に、現代社会の中で、遺伝子の意味や、親から子に遺伝するものの本体が理解されているのでしょうか？塩基配列によって決まるゲノムは、決定論的要素が強いですが、遺伝は、確率論的概念の理解なしには語ることはできません。遺伝が、決定論の延長線上にないことを知っていることは、非常に重要です。たとえば、遺伝病といわれている疾患は、あたかも、親から子に100%の確率で発病をもたらすと思われがちですが、ほとんどの場合、遺伝要因と環境要因の両方の要素が絡み合って発病します。遺伝学教育の中で、遺伝のイメージを決定論から確率論へ変革していくことは、本学会に属する我々遺伝学者や、遺伝学教育に携わる人間にとって使命です。正しい遺伝学教育を遂行していくことで、遺伝を客観性の中で捉えることの重要性を社会が理解することは、現在に生きる人々の人生を、根柢なき不安や危惧から解放すると考えます。

また、現代社会は、クローン動物に象徴されるように、遺伝子や細胞を操作する技術の進展が著しく、ヒトゲノムにおいても、個人のDNA全塩基配列が公表される時代です。遺伝子導入作物も、一般市民に広く知られる事実となっています。このような急激な遺伝学の発展に伴い、特に医学の分野では、遺伝要因の強い疾患が明確化され、再生医療の社会的ニーズが急増しています。人々は、近い将来、「人間の能力や性格が、遺伝子によってどのように決まっているか」を知りたいと思うようになることは容易に想像され、それを実証科学として成立させるレベルまで、研究は進展しています。しかしながら、このような社会的ニーズを追求することと表裏一体の問題は、遺伝子導入作物の安全性、個人情報保護、あるいは生命倫理の立場から、「人類は今後遺伝学とどう向き合っていくたらよいか」について、真剣に考えることです。

この公開市民講座をパネル討論会形式で開催することにより、遺伝学に携わる各界のエキスパートが問題点を指摘し合い、聴衆である一般市民や高校生・中学生と交流することで、偏見のない健全な社会を構築するためには、どのような遺伝学教育が必要かについて答えを探り、ある種の提言ができることを期待します。また、一般市民が、ゲノム、遺伝子、遺伝といった言葉の意味や知識を統合し、日常生活を考え直す機会を提供できるものと期待しています。

4. 講演要旨受付：2007年6月2日～6月26日

5. 総会・受賞講演：名古屋大学工学部 IB 電子情報館 2階 9月4日(木) 17:00～19:00

6. 懇親会：名古屋大学生協フレンドリー南部 9月4日(木) 19:00～21:00

7. 学生への旅費援助：

学生会員奨励のため、発表する学生会員に旅費の一部を援助（交通費実費程度）いたします。ただし、所属研究室や日本学術振興会などから旅費が支給される方のご遠慮ください。

※大会全期間参加を条件とします（9月3日～5日）。

申請方法：以下の6点をA4 1頁に記載し、下記住所まで郵送 1) 氏名, 2) 所属と学年, 3) 所属住所, 4) 旅費援助希望理由, 5) メールアドレス, 6) 指導教員のサインと押印。

注) 申請書は1人につき1枚提出ください。研究室単位の申請は、先頭記載者のみの申請となります。
締め切り：6月26日着

送付先：〒411-8540 三島市谷田1111 国立遺伝学研究所内 日本遺伝学会
遺伝学会80回大会 旅費援助申請
TEL：055-981-6736 FAX：055-981-6736

8. Best Paper 賞：

昨年の大会と同様の要領で、大会発表の一般演題の中から優れた研究発表10件程度を選んで表彰いたします。シンポジウムに選ばれた講演も対象になります。

9. 一般講演申し込み：

大会ホームページ (<http://bunshi4.bio.nagoya-u.ac.jp/~iden80/index.html>) の申し込み画面から申し込んで頂くようになっております。

申し込みの注意点

- ・日本語要旨と英語要旨の両方の登録をお願いします。
- ・一般講演の申し込みは1人1題を原則とします
(シンポジウム, ワークショップ, 特別講演等の招待者は、この限りではありません)。
- ・一般講演で発表できるのは日本遺伝学会会員のみです。2008年度までの遺伝学会費を7月15日(火)までにお納めください。
- ・発表される方で日本遺伝学会に未入会の方は、先に入会手続きを日本遺伝学会ホームページからお願いします (<http://www.soc.nii.ac.jp/gsj3/nyukai.html>)。なお、会員でなくても非会員扱いで大会に参加できます。

- ・オンライン演題登録後、確認修正画面で登録番号とパスワードにより登録をご確認下さい。
- ・登録番号やパスワードを忘れた場合のお問い合わせには応じられません。パスワードを忘れた演題で修正が必要になった場合には、登録をやり直し、大会事務局 (iden80@aeplan.co.jp) にお知らせ下さい。講演要旨締め切りは6月26日です(6月2日～6月26日)。

10. 参加登録:

大会ホームページ (<http://bunshi4.bio.nagoya-u.ac.jp/~iden80/entry.html>) から参加申し込みを行い、GG5 Vol. 83 No. 2 の郵便払込取扱票の通信欄に以下の2点を記入し、下記郵便振替口座までお振込みください。

- ・ 1. 下記の参加費と懇親会費(一般・学生・一般非会員・学生非会員)、それぞれの金額と合計の金額
- ・ 2. 学生の方は、所属機関、学年、指導教官名
合計金額が0円の場合はお振込不要です。
* 払い込んだ方が特定できるように一人1枚ずつ別々の払込取扱票をお使いください。
* 1枚の払込取扱票を用いて研究室単位等でまとめて支払わないようお願いします。
所定の振込用紙がない場合、郵便局に備え付けの振替用紙(青色)で、下記郵便振替口座までお振込みください。

<送金先>郵便振替

口座番号	00820-1-134523
加入者名	日本遺伝学会 第80回大会

参加費 会員の方:2008年度までの遺伝学会会費を7月15日(火)までにお納め下さい。

現在非会員で会員料金で参加される方:先に入会手続きを行って下さい。

(<http://www.soc.nii.ac.jp/gsj3/nyukai.html>)

	事前登録(6月2日～7月31日迄)	当日登録
一般会員	7,000円	8,000円
学生会員	3,000円(但し演者は無料)	4,000円
一般非会員	9,000円	10,000円
学生非会員	3,000円	4,000円

・懇親会費

	事前登録(6月2日～7月31日迄)	当日登録
一般会員	6,000円	7,000円
学生会員	3,000円	4,000円
一般非会員	6,000円	7,000円
学生非会員	3,000円	4,000円

注意事項

- ・大会及び懇親会への参加者は、参加登録を行ってください。参加章の無い方は、原則として会場への入場はできません。
- ・参加登録の完了には、Web参加申し込み及び参加費振込の両方が必要です。注)海外からの参加者は当日受付でのお支払いとなりますので、この限りではありません。
- ・8月1日以降の参加登録は、当日受付にてお願いします。

- ・7月31日迄に Web 参加登録と参加費振込を済まされた方には、8月中旬に参加章と講演要旨集を郵送します。それ以外の参加者には大会当日にお渡しします。
- ・*海外からご参加の場合の注意点 お支払いは当日受付で行ないます。登録日に応じた金額をご用意の上、受付までお越し下さい。参加章と講演要旨集は参加費と引き換えにお渡しします。

当日登録

事前参加登録をされなかった方は、当日会場で参加登録をお願いします。(参加章と講演要旨集は参加費と引き換え)

当日登録の学生非会員は、学生証を提示をお願いします(提示のない場合：一般非会員扱いとなります)。ご不明な点がございましたら、下記の大会準備委員会事務局までご連絡ください。

11. 日本遺伝学会第80回大会準備委員会：

大会委員長	森 郁恵 (名古屋大学大学院理学研究科)
顧問	杉浦 昌弘 (名古屋市立大学大学院システム生命科学研究科)
プログラム委員長	松本 邦弘 (名古屋大学大学院理学研究科)
事務局 長	石浦 正寛 (名古屋大学 遺伝子実験施設)
副事務局 長	本間 道夫 (名古屋大学大学院理学研究科)
会計	古賀 章彦 (名古屋大学大学院理学研究科)
ホームページ	久原 篤 (名古屋大学大学院理学研究科)
プログラム委員	近藤 孝男 (名古屋大学大学院理学研究科)
	西田 育巧 (名古屋大学大学院理学研究科)
	堀 寛 (名古屋大学大学院理学研究科)
	武田 穰 (名古屋大学 産学官連携推進本部)
	能登原盛弘 (名古屋市立大学 システム自然科学研究科)
	町田千代子 (中部大学 応用生物学部)
	飯田 滋 (自然科学研究機構 基礎生物学研究所)
	堀内 嵩 (自然科学研究機構 基礎生物学研究所)
	星野 敦 (自然科学研究機構 基礎生物学研究所)

12. 連絡 先：日本遺伝学会80回大会事務局 (株 エー・イー企画内)
 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-2-8 昭文館ビル3 F
 Tel：03-3230-2744, FAX：03-3230-2479
 Mail：iden80@aeplan.co.jp

◆◆◆ 会長からのメッセージ：その2 ◆◆◆

昨年会長に就任してから早1年以上経過しましたので、残る任期を全うさせて頂くため、我々役員が直面している課題について取り組みの現状を報告し、会員の皆様のご意見とご協力をいただきたいと思っております。

大会について：学会の最大の行事である年会は岡山大学で香川大会長及び準備委員が献身的に努力されたおかげで、大変盛りあがった、何時迄も心に残るユニークな年会となり大成功でした。国際シンポジウムでは世界の第一線の研究者を招いて、躍動する遺伝学がヴィヴィッドに参加者に伝わったと思えました。遺伝学の教育問題についてのワークショップでは現場の先生も多数参加されて、閉会後も熱心な討論がなされ、読売新聞に記事として掲載されました。公開市民講座は「身近な生物とヒトを通してみる新しい遺伝学の潮流」という題で日本独特のモデル生物を用いた研究などについて講演者は興味深い内容を解り易く話してくれました。しかしこのような立派なプログラムでもこの数年は研究成果公表のための文科省の科研費助成金（150万円）の補助が受けられていません。このため、大会のお世話をいただく現地の大会委員には大変ご苦勞をおかけしたのは、会長として心が痛みます。

本年度は名古屋大会で森 郁憲大会長を中心に、名古屋地区の会員が強力な布陣の委員会を立ち上げ、万全の準備を整えつつあるので、安心してすばらしい大会になると期待しています。この原稿を書いているとき学会事務局から研究成果公表の科研費助成金が名古屋大会に100万円認められたという知らせが入り大変喜んでおります。信州大会にこの流れを伝えたいと思います。名古屋では小さい子供をもつ女性の大会参加を助けるために託児所の設置を準備しました。森大会長の提案でこれを機会に学会として大会に託児施設の設置のための補助を恒久化することが提案されました。今年の名古屋大会は会場の都合で会期がいつもより早い9月3～5日になりましたので、会員の皆様はお気をつけ下さい。名古屋大会では素晴らしいプログラムを準備しておりますので、学会ホームページで大会ニュースを是非ご覧下さい。

来年度の第81回大会は信州大学の伊藤建夫教授を大会長に松本で開催される予定です。長いあいだ大会は10箇所の主要都市を順番に回って10年毎に同じ都市で開催されるのが慣例になっていました。企画・集会幹事の岩崎先生が会員の意見を聞いて、信州での開催を提案されましたが、斬新であると同時に会員数の少ない地方での開催に不安も伴います。しかし伊藤教授が3月末で信州大学理学部長の任期が満了するので、4月から大会の準備にエンジンを満開にするとおっしゃっていますので、有能なアドミニスレーターである先生の手腕に期待して、学会本部は側面からサポートしていこうと考えています。長野での開催を機会に遺伝学の地方への普及と学会員の増加に結びつけられればという思いがあります。松本大会を成功させるために、長野県の会員だけでは困難で周辺の会員更に地域を越えた会員の協力をお願いいたします。松本では1947年に第19回大会が旧制松本高校で開催されています。大会開催地を見てみると僕が学会に加入して始めて大会で発表したのが1971年の福岡大会で、主催者（大会長？）の堀内忠朗教授に発表を褒められて感激したことを今でも鮮明に覚えています。このころから10年一周という慣例ができたようです。静岡、富山、金沢、愛媛などで開催されたことも以前はありました。その頃僕ら院生は地方の学会に出席してその後で周辺を旅行するのを楽しみにしていました。今は忙しすぎてそのような習慣はもう無くなったのでしょうか。松本大会を成功させて、地方を元気にさせましょう！

Genes & Genetic Systems：遠藤編集長の努力と科学技術振興機構のJ-STAGEの協力で、GGGの念願であった投稿から編集迄の電子化が遂に完成いたしました。ご苦勞さまでした。名編集長の努力で投稿数も増えて、発行期日も正常化されました。電子化にともない海外からの投稿が増えているようです。学会誌の国際化が学術振興会から求められています。editorやadvisorにもっと多くの外国人を入れるために、会員の皆様のご協力をお願いいたします。先生方の研究室へ留学されて帰国した外国人などを積極的に遠藤編集長に推薦して下さい。3年前から始めたGGG Prizeは推薦が無くて1昨年は該当者なしという残念な結果になりましたが、昨年は2名受賞者が決まりました。その内の1名は小林武彦会員で、遺伝学会奨励賞の受賞者として求められてGGGに書いた総説が優れているとGGGの外国人編集委員である著名な遺伝学者が推薦してきました。今年も会員の皆様から積極的にGGGに投稿していただいてGGG Prizeの受賞者を出せることを期待しております。

残念なことに昨年はGGG発行に対する学振の科研費助成金の申請が認められませんでした。学振からの不採用の通知には予算が減額されたため、不採用の理由の問い合わせには答えないと書かれていました。情報公開が求められている中でこの姿勢は異常です。翌年度の申請に対策をたてるために、いろいろな伝手で情報を

集めました。先ずこの項目の科研費の減額は前年度の採択者が助成金の不適切な使用を会計監査で指摘されたために、財務省から平成19年度のこの予算は前年度の半額に減額されたようです。GGGの評価は高くなっているはずなので、減額はともかく、不採択というのは納得がいかないの、学振関係者に直接聞いてみました。その結果19年度の審査の基準は経理を重くみた結果らしいことがわかりました。GGG以外に農芸化学会や生物工学会などの伝統ある英文紙も軒並不採択になったそうです。GGGについては申請書に書いた印刷部数や印刷経費が報告書での実際の支出より多かったことなどが思い当たりました。また印刷費についても入札が望ましいと指摘されていましたが、急で対応出来なかった事もいい結果にならなかった可能性もあります。政府は某大な赤字をかかえているために、徹底的な予算の削減と厳しい会計検査がおこなわれており、特に継続的事業については見直しがされ、新規事業の予算の算出のために、廃止や削減の対象となっております。平成20年度の申請については、遠藤編集幹事を中心に小林会計幹事、斎藤広報幹事、学会事務の鈴木さん等が協力して、入札も行い、上記の問題点を改善した申請書を出しましたのでそれが効をもたらすことを期待しております。平成19年度の遺伝学会の単年度収支が約400万円の赤字になったのはGGG刊行のための科研費助成費が採択されなかったためです。幸いこれ迄の会計幹事の努力によって、予備費の蓄積があったため、穴埋めできましたが、不採択が今後も続くようだと学会費の主要な支出である出版の経費節約などの対策を考える必要があります。その一つの選択肢が冊子体無しのオンラインジャーナル化や冊子体を希望者や機関会員のみにして大幅に減らすことです。世界的にもアメリカのPLOS JournalsやイギリスのBioMed Centralの発行する多数のJournalsはインパクトファクターも上げてきて、成功しています。日本でも生物物理学会が昨年から英文のオンラインジャーナルを発刊いたしました。今後の科研費の情勢を見ながら、GGGの出版形態を考える必要があります。

将来計画：山本博章幹事が中心に委員会を立ちあげて、以下の問題を取り上げてEメールで意見の交換を進めております。

- 1) 遺伝学談話会（開催場所、日時等）
 - 2) 法人化
 - 3) 出版計画
 - 4) 副会長設置
 - 5) 退職会員の会費改定（この案件はすぐ検討に入れると思います。）
- 1) 遺伝学談話会は第1回として池村幹事が長浜バイオサイエンス大学のスタッフの協力を得てシニアの経験と知識を若手のバイオフィンフォーマテックの遺伝子アノテーションに生かすという趣旨で1月の26日に盛会のうちに行われました。第2回は山本幹事のお世話で3月に岩手で行われ大変盛会であったとうかがっております。山本幹事は談話会の企画で苦慮されているようですので、各地区の評議員が少なくとも1回はその地区で談話会を開いて、ご協力下されば助かりますので、よろしくお願い致します。
 - 2) 法人化問題：山本幹事が中心になって委員会を立ち上げEメールで意見と情報の交換を行ってきました。政府が法人の制度改革を行いつつあって、非営利団体認定委員会を設置して、審議を行っています。現状では学会等の学術団体が非営利団体として認定されるかどうか不明です。学術会議や遺伝学会が加盟している学術会議の中の生物科学学会連合を通して、学会を非営利団体として認められるように協力して運動していくことになっています。遺伝学会としては現状では、予算規模も小さく、税金がかかるほどの事業もないので、急いで法人化する必要はなく、生科連などと連携して法人化問題を引き続き考えていくことになっております。
 - 3) 出版計画：石和前会長時代に提案された案件です。高畑前幹事が遺伝学会を中心に遺伝学の最先端の研究を解りやすく解説するシリーズ本として出版する準備を進めてきましたが、このような企画を引き受けてくれる出版社を見つけるのが困難ということで、中止という事態になりました。高校の遺伝学の教科書について問題点が指摘されていますので、専門家向けでないもっと一般の人を対象にした単行本の出版等を『将来計画』や『遺伝学教育と普及』委員と相談しながら検討していきたいと思っております。
 - 4) 副会長設置：遺伝学会の会長が代わったとき、前内閣からの引き次をスムーズにおこなえるように副会長職の設置を僕が提案しましたが、それより次期会長を任期の2年前に選出しておいて、現会長の補佐や、代行ができるようにすることの方がベターだと現在は考えております。近年は会長が2期連続して選ばれることが多くなっていますが、僕は2年1期を務める方が会長（他の役員も）になる人の負担も少なく、全力投球をしてもらえると考えております。この問題は次期執行部で継続的に考えていただけたらと思いますので重点項目から外します。
 - 5) 退職会員の会費改定：将来計画委員会での話し合いの結論は学会の経済的な負担にもならず、遺伝学会は若者だけでなくシニアも大事にするという観点からも退職して主たる収入が年金である方には学生会員並の会費にするという案になりました。次会の評議員会で提案する予定です。

男女共同参画・年齢による差別：遺伝学会は早くから大会中の託児施設の提供等女性研究者の支援に心がけてきました。昨年度から男女共同参画学協会連絡会に加盟し、連絡会の一員として連携して活動することになりました。大規模アンケートに対する協力が最初の仕事で、会員のご協力で高い回答率が得られました。このアンケートが連絡会でまとめられて内閣府の男女共同参画の担当大臣に提出され、政府の政策に反映されます。松浦担当幹事を中心に委員会を立ち上げて、大会中の託児施設の設置に対する学会本部からの援助が委員会できまり次回の評議員会で提案される事になりました。名古屋大会では主催者企画のワークショップとして男女共同参画問題がテーマとして取り上げられております。松浦幹事に積極的に協力して有意義な集会になるよう会員の皆様にご協力をお願いいたします。

日本で女性科学者の PI (Principal Investigator 研究室主宰者) が少ない原因について、女性が働く環境が整備されていないことが大きな原因だと思います。環境整備については政府の理解が深まり、積極的に我々が働きかければこれから種々の改善がなされるでしょう。しかしもっと大きな問題は日本の伝統的カルチャーだと思います。多くの親は娘が経済的にも精神的にも自立することを望まず、結婚して家庭の主婦になるのを望んで娘をそのような価値観で育てて来ました。今でもマジョリティーはそうだと思います。生命科学分野の女性研究者の割合は増加し、学会でも優れた研究発表も多くなってきました。教授適齢期の女性研究者も増えているはずですが、敢えて申し上げれば、このギャップの一因は PI に要求されるリーダーシップをとれる女性が少ないためだと思います。ある親が自分の娘を自立できるように常日頃家庭教育を心がけてきたが、娘に『厚化粧して金持ちの男をだまして結婚した方が人生楽です』と高校では友達と言い合っているといわれ、啞然として、家庭での教育の非力さを嘆いておられました。カルチャーは法律では変えられません。日本でも大学等で女性教員の割合を一定比率にすることを義務づける所謂 quota 制度の導入が始まりつつあります。これからは女性である事が有利になりますので、女性会員はその日に備えて研鑽を積んで下さい。遺伝学会大会では女性が肩で風切って男性を引きつれて歩く風景がよく見られるようになることを願っています (現在 UCLA の教授になっている僕の友人の日本人の女性は若い頃からそうでした)。

先日女性差別だけでなく年齢による差別も取り上げて欲しいというメールを会員から頂きました。どんなに有能で健康であっても日本では60~65歳になれば、強制的に退職させられる現行制度は、年齢による差別で、アメリカでは憲法違反と判断されています。僕もこの強制退職制度は不合理で女性差別の解消には一定の進展はみられているが、年齢による差別の解消は全く進んでいないのをとても残念にもっていました。健康で有能な高齢者に働いてもらわないと高齢化社会の年金問題はますます深刻化します。この問題の解決は日本では未だ未だ時間がかかると思われたので、僕個人の問題解決は自分で自分の仕事をつくることしかないということで、研究用試薬を開発・販売するバイオベンチャーの会社を起業しました。資金集め、商品の企画と生産、社員の採用と教育、製品の販売等々馴れない仕事ばかりで失敗を重ねながら3年目を終えようとしています。現状では、もうひと頑張りでなんとか損益分岐点を越えられそうな薄明かりが見えてきました。私事にわたりませんが、この事業には妻が製品の開発や製造の現場で大きな貢献をしてくれ、彼女がいなければこの会社はとくに倒産していました。僕はこの会社を成功させて、資金が出来たら再び自分で研究が出来る様な環境を作りたいと夢を追っています。男女、老若がその能力を精いっぱい発揮出来る社会にしないと、グローバリゼーションの中で日本の未来は無いと思います。年齢による差別の撤廃の先ず声をあげながら、実効ある運動を同志と模索していきたいと思っています。

国際遺伝学会大会の招致：石和前会長の時代に2008年のドイツでの大会の後に日本に遺伝学会が中心になって2013年の大会を招致する運動が開始されました。今期では五條堀渉外幹事が中心になり国際遺伝学会連合に加盟の人類遺伝学会、育種学会、進化学会にもよびかけて、招致委員会を発足させ招致が一層現実味をおびてきました。今年の7月12~17日にベルリンで開催される大会の役員会に五條堀幹事が出席して京都への2013年大会招聘の提案のプレゼンテーションをすることになっています。

終わりに：このメッセージを書いていると次々にやり残している学会の課題が思い出されて来て、焦りが出てきました。残る8か月の任期中に会員のご協力で少しでも進展を図って次期会長にバトンタッチをしたいと思っています。一部脱線してブログ調に一部なってしまいました。学会のホームページを会員の交流の場に来たらと本稿を書きながら思いました。次ぎに幹事の先生からの投稿を期待しています。

2008年4月4日

日本遺伝学会会長 品川日出夫

追記：投稿後に GGS 出版のための科研費補助金 (平成20年度分) 採択の報せが来ました。申請書を準備された方々ご苦労様でした。

惜 別

飯野徹雄先生のご逝去を悼む

東京大学理学部名誉教授、飯野徹雄先生は、平成20年2月22日、病によりご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

平成10年早稲田大学定年後は、かねてからのライフワークであった、「フクロウの文化史」の研究に没頭されておられました。その間、フクロウ文化史関連の著書を数冊書き上げられました。また、豊島区とフクロウは縁が深いとのことで、豊島区長と懇意となり南池袋小学校内に「豊島みずく資料館」が設立されました。その展示物は飯野コレクションが母体となっており、名誉館長を勤められました。直前まで、その飄々として知的かつ物静かな語り口で梟の話、学問の話を見せていただきましたが、その頭脳明晰さは晩年でも秀逸でした。また全く敵のおられない性格は頭の下がる限りでした。まだまだ長生きしてくださって我々の相談相手になって欲しかったのですが、下記のようにまことに卓越した学問的人生を過ごされ、今は「お疲れ様でした、安らかにお眠りください」とご冥福をお祈りするのみです。

先生は、昭和3年8月12日東京府にお生まれになり、昭和26年3月東京大学理学部植物学科を卒業され、国立遺伝学研究所、ウイスコンシン大学、国立遺伝学研究所微生物遺伝部長を経た後、昭和46年4月東京大学理学部教授に転任

になり、遺伝学講座を担当し、併せて大学院理学系研究科植物学課程を担当されました。昭和48年4月から大学院理学系研究科植物課程主任、同研究科委員会委員、昭和54年4月総長補佐、昭和56年4月総合研究資料館運営委員、昭和58年4月からは遺伝子実験施設長を併任されました。また、理学部附属植物園長も歴任されました。平成元年3月31日停年により東京大学を退職され、同年5月16日東京大学名誉教授の称号が授与されました。

大学外では、昭和51年9月総合大学院問題専門委員会の生命科学小委員会委員、昭和56年6月から平成2年3月まで国立遺伝学研究所評議員として、昭和58年5月から平成元年4月まで岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所運営協議員も兼任して、国立共同利用研究機関の運営に参画し、また、昭和59年から同63年3月まで文部省学術国際局科学官を務めたことをはじめ、学術奨励審議会専門委員、学術審議会専門委員、日本学術振興会流動研究員等審査会専門委員、生物の自他認識に関する研究開発専門委員会委員、蛋白質工学に関する研究開発専門委員会委員、総理府科学技術会議専門委員、資源調査会専門委員、日本学術会議会員、および学術会議の各種研究連絡委員会委員を歴任し、遺伝学を専門とする生物学者の立場から、わが国の科学技術の振興に貢献されました。そ



の間、特に学術審議会にあっては、その特定領域推進分科会の組換え DNA 部会委員、安全審査会主査、組換え DNA 実験指針検討小委員会委員長を歴任し、我国の組換え DNA 研究の推進と安全確保のために貢献されました。また、日本遺伝学会評議員、同会長を務め、我国の遺伝学の発展に力を尽くされました。

平成元年4月から平成10年3月31日まで、早稲田大学人間科学部教授に異動され、同時に早稲田大学人間科学研究科委員長、評議員も兼任されました。

国際的にも、国際遺伝学連合 (IGF) の代議員および理事として、あるいは日本学術振興会日米科学協力事業専門委員会委員として、学術の国際交流に尽くされました。日米科学技術協力事業では、組換え DNA 研究計画委員長として、その立案と運営に尽力されました。

先生は、細菌遺伝学の分野で多くの先駆的な研究業績をあげられましたが、特にサルモネラ菌の鞭毛相変異現象の遺伝学的解析は、国際的に高い評価を得られました。すなわち、サルモネラ菌の鞭毛相変異に関する遺伝学的説明を与えられました。続いて東大で杳掛（現岡山大学）らと共に、その相変異領域内に存在する *vh2* 遺伝子の産物とその可逆的逆位反応を触媒する酵素 DNA インベルターゼであることを証

明し、DNA の再構成による遺伝子発現調節機構理解の先駆けとなりました。

サルモネラの運動に関する多数の突然変異体を分離し、国立遺伝研の研究者・東大院生とともに五十有余の遺伝子を同定し、それらが染色体上に集団を構成していることを明らかにしました。さらに鞭毛形成に関して、遺伝学的手法に加えて電子顕微鏡観察、試験管内蛋白質合成などの分子生物学的手法により、鞭毛形成のカスケードを明らかにするとともに、構造形成そのものが鞭毛遺伝子の転写調節に係わることを示しました。フラジェリン重合の生物物理的研究、統計的手法を駆使した鞭毛繊維長決定機構も示しました。朝倉（当時名大）らとの共同研究による鞭毛繊維の波形の *in vivo*, *in vitro* 集合による解析は、当時の *self-assembly* の概念確立に大きな役割があったことも思い出されます。

以上の業績により、昭和39年に遺伝学会賞、昭和48年に朝日賞を、平成3年4月29日に紫綬褒章を受章されました。また、平成11年には、旭日従叙章を受章されました。

(東京大学大学院理学系研究科・
生物科学専攻・米田好文、記)

第 9 回 遺伝学談話会

日 時：2008年 1月26日

場 所：長浜バイオ大学

本年最初の遺伝学談話会が「自分が興味を持っている (or 持っていた) 遺伝子がどの範囲の環境微生物に存在しているかを知る講習会」と題して池村淑道会員を中心に長浜バイオ大学において開催されました。今回の特徴はそのタイトルにもありますように講習会型の遺伝学談話会であったことです。長浜バイオ大学は文部科学省の「ライフサイエンス分野の統合データベース事業」において人材養成プログラムを担当していることもあり、充実したテキストを用い、データベース事業専用の部屋を用いて行われました。

参加者 (20名) は、各自が興味を持つ既知の遺伝子やタンパク質の相同配列が、環境由来のメタゲノム配列データベースにあるか否かを探索し、ヒットした場合は、その環境由来の配列が既知の微生物種のどれに近縁かを推定することにしました。さらに希望者には、特定のテーマをもとに、機能未知の上記メタゲノムデータの中から、有用遺伝子を探索する実習も行われました。

今回の会はシニア世代のノウハウを若手に継承する際の具体的ななかかわり方の一例 (例えばキュレータとしての) を提示する試みでもありました。その意義は参加者に充分理解されたと思います。ちなみにシニア世代 (ちょっとあいまいな表現ですが) の参加者の割合が多かったことも特徴です。「なれないのがやると時間がかかるね」などと隣の品川会長に言われながらも知らぬ間に時間が経過しました。由良隆会員と学部学生の共同作業の様子も見受けられました。大変有意義な会であったと思います。

「遺伝学普及・教育担当」特別幹事の池村会員とスタッフの皆様の熱意がひしひしと伝わる会でした。池村会員とともに講師を務めてくださった上原啓史研究員、阿部貴志会員をはじめ、会場を提供し準備にかかわってくださった長浜バイオ大学のスタッフの皆様に感謝いたします。特にシニアにつかまり引っ張りだこであった実習補助の学生の皆さんには大感謝です。ありがとうございました。

(将来計画幹事・山本博章)



第10回 遺伝学談話会

日 時：2008年3月10日

場 所：奥州市牛の博物館

本年2回目の遺伝学談話会は、東北地区の国会談話会をベースとして山本和生会員を中心に準備が進められました。会場は岩手県奥州市の牛の博物館で、本会評議員の石川隆二会員と山元大輔会員を講師とする講演会として開かれました。

石川会員は「なぜ、熱帯のイネが北にすすめたのか？」と題して、イネの起源から栽培イネへ、さらには約3000年前の日本への渡来から2900年ほどかかって北海道でも栽培されるようになった過程で、どのような遺伝的変異がそれを可能にしたか、またそれら遺伝子座の現在における利用法等を、鍵となった系統「赤毛」を中心に多くの品種を示しながら解説しました。稲作が盛んな地域でもあり一般の参加者から多くの質問が出され、時間経過を気にするほど大変活発な討論が行われました。

山元会員は「性行動を生み出す遺伝子の研究」と題して、キイロショウジョウバエ性行動突然変異体のスクリーニング法といくつかの代表的な遺伝子、なかでも雄が同性愛行動をとる突然変異体 *satori* の解析から、行動の性差を生む分子機構について、時には（といますか可能な限り、また自然に、でしょうか）ヒトになぞらえて興味深く、オスの行動をとらせる指令細胞の話まで、最先端の成果を説明しました。会場は笑いに包まれながらも真剣に聞き入っている一般参加者が目立ちました。一般の参加者からのヒトの脳の性差を生む機構に関する重要な質問は、質問したご本人が大変聞き辛そうな雰囲気発言されましたが、このような科学的な話題が普通に躊躇なく討論できる社会的な雰囲気・環境の醸成も、遺伝学の普及を目指す本会の責務の一つかと感じました。

今回の談話会の特徴はより広く一般公開を目指し、事前参加登録もなしにしたことです。参加者数には当初気をもみ、50人収容の会場でしたが、開けてみると満杯で一時は立ち見や会場外へのモニター設置も覚悟したりしました。たいへん盛況の裡に終えることができました。またこの会は地元の数紙にも事前また事後にも紹介されました。

本来なら休館日の月曜日の使用を許可くださった岩手県奥州市と、実際博物館内において当日の準備だけでなく早くより広報機関への対応をも進めてくださった黒澤弥悦主任学芸員および高野教導副館長、また当日お手伝いくださった当博物館友の会の会員に感謝いたします。年度末の多忙な時期に準備を進めてくださった山本（和）会員、講師を引き受けてくださった石川会員、山元会員、また東北地区初めての試みに参加して下さった市民のみなさん、どうもありがとうございました。

(将来計画幹事・山本博章)



第18回 酵母合同シンポジウム

「酵母の挑戦 ～生命現象の包括的理解と応用に向けて～」

- 主催： 酵母合同シンポジウム実行委員会
会期： 2008年6月5日(木)、6日(金)
会場： 甲南大学甲友会館 (〒658-8501 神戸市東灘区岡本8-9-1)
参加費： 一般5,000円 (事前登録5/26まで、当日6,000円)、学生無料
懇親会費： 一般5,000円 (事前登録5/26まで、当日6,000円)、学生2,000円 (当日3,000円)
振込先： 郵便振替口座 加入者名：第18回 酵母合同シンポジウム実行委員会
(口座番号0-0930-8-269259)
- 講演予定者： 杉浦麗子 (近畿大)、由里本博也 (京大)、竹川 薫 (香川大)、野田健司 (阪大)、伊藤隆司 (東大)、入江賢児 (筑波大)、山下 朗 (東大)、稲田利文 (名古屋大)、井沢真吾 (京大)、平岡 泰 (阪大)、渡邊嘉典 (東大)、柳田充弘 (京大)、丹羽修身 (かずさ DNA 研)、宮川都吉 (広大)、地神芳文 (産技総研)、久下周佐 (東北大)、斎藤春雄 (東大)、阿部文快 (海洋研究開発機構)、高木博史 (奈良先端大)、吉田 聡 (キリンビール)、下飯 仁 (酒類総研)、堤 浩子 (月桂冠)、島 純 (食品総研)、近藤昭彦 (神戸大)、赤田倫治 (山口大)、家藤治幸 (酒類総研)、金子嘉信 (阪大)、辨野義己 (理研)、長谷川和哉 (原謙三国際特許事務所)、大矢禎一 (東大)、中村太郎 (大阪市大)

<http://www.sci.osaka-cu.ac.jp/biol/cbiol/pombe/godo-sympo18/godo-sympo18.html>

お問い合わせ先： 桂樹 徹 〒630-0101 奈良県生駒市高山町8916-5 奈良先端科学技術大学院大学

Tel : 0743-72-5421 Fax : 0743-72-5429

E-mail: katsurag@bs.aist-nara.ac.jp

平成20年度化学素材研究開発振興財団記念基金

「グラント」研究奨励金候補者募集

(財) バイオインダストリー協会

平成20年度化学素材研究開発振興財団記念基金「グラント」研究奨励金候補者を下記の要領にて募集致します。多数のご応募をお願い致します。

なお、本研究奨励金は、化学またはバイオの素材に関する基礎・応用研究および利用技術開発に携わる有望な研究者に対して、平成8年度より、研究奨励金の交付を行っているものであります。

募 集 要 項

- 対象分野および対象者： 化学またはバイオの素材に関する基礎・応用研究および利用技術開発に携わる有望な研究者。なお、ここでいう化学素材の研究は、バイオテクノロジー・ライフサイエンスと何らかの接点があることが望ましい。
- 対象者の資格： 交付の時点で、協会の会員（個人会員、または賛助会員会社・維持会員会社の役員・従業員）であり、平成20年4月1日において年齢50才未満であること。
- 採用件数： 毎年7件以内
- 金額： 1件につき50万円
- 申込み方法： ホームページ (URL:<http://www.jba.or.jp/>) から募集要項・応募用紙をダウンロードできます。また、ご連絡先（氏名、所属、住所、電話・FAX番号、E-mail）を明記し、

下記にご請求下さればご送付致します。

書類提出締切り：平成20年6月30日(月)必着で、応募用紙一式に記載したものを郵送、または e-mail
でお送りください。

選考方法：交付対象者は、本分野の学識経験者で構成する選考委員会において審議し、決定し
ます。選考委員会の審議内容は公開致しません。

申込み先：(財)バイオインダストリー協会
化学素材研究開発振興財団記念基金「グラント」研究奨励金事務局
土橋・玉手
〒104-0032 東京都中央区八丁堀2-26-9 グランデビル 8 F
TEL 03-5541-2731 FAX 03-5541-2737
E-mail grant@jba.or.jp

第25回（平成20年度）持田記念学術賞候補者推薦依頼について

持田記念医学薬学振興財団より第25回（平成20年度）持田記念学術賞候補者の推薦依頼が届いております。
推薦を希望される方は学会事務局までお問い合わせください。（学会内で選考のため財団の提出締めきりより、
通常は1ヶ月早く締めきる。）

（学会問い合わせ先）

TEL 055-981-6736 FAX 055-981-6736

E-mail:japgenet@lab.nig.ac.jp

担当：鈴木

第25回（平成20年度）持田記念学術賞候補者の推薦要領

1. 持田記念学術賞の対象

本財団は、生命科学を中心とする医学、薬学及びこれらに関連する物理学、化学、工学等の先見的、独創的研究を育成し、かつ、これらの成果を総合して医療に応用し、わが国の医療及び国民の保健向上に資することを目的としております。持田記念学術賞はその一環として創設された冠となる賞であり、新進気鋭の研究者で次の3項目の研究分野で、顕著な功績があった方に贈呈しております。

- (1) 生命科学と医療応用の研究
- (2) 薬物科学と医療応用の研究
- (3) 情報科学と医療応用の研究

2. 褒賞金

1件500万円で2件以内

3. 推薦方法

(1) 推薦人

- 1) 当財団より推薦依頼を受けた学会
- 2) 当財団の理事又は評議員

※1推薦人は1候補者に限ります。

(2) 候補者

別添推薦書に必要事項を記入し、推薦人の署名・捺印を受けてから当財団あてに送付してください。

4. 締切期日

平成20年7月31日(木)（当日までの消印有効）

5. 選考の方法

選考作業は選考委員会が行い、平成17年9月に受賞候補者を内定、当財団理事会に諮り決定いたします。

6. 褒賞金の贈呈式

平成20年10月17日(金)

7. 提出先及び問合せ先

財団法人 持田記念医学薬学振興財団 事務局

〒160-0003 東京都新宿区本塩町7番地6 四谷ワイズビル

Tel. (03) 3358-7211 (代表)
Fax. (03) 3357-1264
E-mail: zaidan@mochida.co.jp
URL: <http://www.mochida.co.jp/zaidan/index.html>

第25回（平成20年度）留学補助金交付対象者募集および第26回（平成20年度）研究助成金交付対象者の募集は、平成20年4月1日（火）より開始され、平成20年6月20日（金）にてメール申請を締切、申請内容確認後の郵送による申請書の締切を平成20年6月27日（金）と致します。詳細は財団HPをご覧ください。

第25回（平成20年度）井上學術賞受賞候補者の推薦について

推薦を希望される方は学会事務局までお問い合わせください。（学会内で選考のため財団の提出締めきりより、通常は1ヶ月早く締めきる。）

（学会問い合わせ先）

TEL 055-981-6736 FAX 055-981-6736

E-mail: japgenet@lab.nig.ac.jp

担当：鈴木

第25回（平成20年度）井上學術賞受賞候補者推薦要項

財団法人 井上科学振興財団

1. 候補者の対象

自然科学の基礎的研究で特に顕著な業績をあげた研究者。

但し、年齢が平成19年9月20日現在で50歳未満の研究者に限ります。

2. 学 術 賞

本賞：賞状及び金メダル 副賞：200万円

授賞件数は5件以内とします。

注）受賞者は、原則として1件につき1人とします。特に複数であることを必要とするときは、それらの研究者の寄与が同等であることを示してください。但し、この場合においても1件として取り扱います。

3. 推薦依頼先

34学会、並びに当財団の理事・評議員等に推薦を依頼します。

4. 推薦件数

各推薦学会または各推薦者から、原則としてそれぞれ1件とします。

5. 提出方法

所定の推薦書用紙（当財団のホームページ <http://www.inoue-zaidan.or.jp/> よりダウンロードできます。）に必要事項を記載し、当財団あてに提出願います。

6. 締切期日 平成20年9月20日（土）

7. 選 考

当財団の選考委員会において選考し、理事会において決定します。

選考の結果は、平成20年12月中旬に推薦者に通知します。

8. 學術賞の贈呈

平成21年2月4日（水）午後4時から 東京で開催の予定。

9. 推薦書提出先及び連絡先

財団法人 井上科学振興財団

〒150-0036 東京都渋谷区南平台町15-15

南平台今井ビル601

電話：03-3477-2738
FAX：03-3477-2747
E-mail：inoue01@inoue-zaidan.or.jp

加藤記念バイオサイエンス研究振興財団 第20回（2008年度）加藤記念国際交流助成について

【加藤記念国際交流助成募集要項】

1. 助成対象者：平成20年4月1日から平成21年3月31日の期間に海外で開催されるバイオサイエンス分野の学会、シンポジウム等で研究発表を行う日本国内在住の研究者。
2. 申込資格：応募締切日に35歳以下の方（医歯学系の大学卒業者は37歳以下の方）。
3. 助成内容：所要経費の一部を援助する。
4. 助成金額：総額750万円。
5. 援助件数：30件程度（前期；15件程度、後期；15件程度）。
6. 応募方法：当財団所定の申請用紙に必要事項を記入の上、当財団に直接申し込む。
7. 応募締切：①前期；4/1～9/30の期間に発表される方は、平成20年5月31日。
②後期；10/1～翌年3/31の期間に発表される方は、平成20年8月31日。
8. 審査方法：当財団の選考委員による審査の上、評議員会議長および理事長の承認を得て決定。
9. 申請書請求先：財団 HP (<http://www.katokinen.or.jp/>) よりダウンロードされるか、下記宛てに「はがき」、「ファクシミリ」または「メール」でご請求ください。
10. 助成を受けられた方は、帰国後1ヶ月以内にA4 1～2枚程度の報告書を電子ファイルで下記のメールアドレスへ提出して下さい。当財団の「財団年報」に掲載する予定です。
11. 助成が決定した場合、氏名、所属機関、研究テーマ、参加学会名等を「財団年報」、ホームページ等により公開いたします。ご了承下さい。

連絡先： 加藤記念バイオサイエンス研究振興財団
住所：〒194-8533 東京都町田市旭町3-6-6
事務局長 落合恵子
TEL & FAX: 042-725-2576
E-Mail: ben.kato.zaidan@kyowa.co.jp

【加藤記念国際交流助成申請の手続き】

加藤記念バイオサイエンス研究振興財団の第20回（2008年度）国際交流助成申請に関する書類は以下の通りです。

申請書に必要事項をご記入のうえ、下記2.以降の書類を添付してお申込み下さるようお願い致します。なお、ご提出いただいた書類はご返却いたしませんのでご了承下さい。

記

1. 申請書（所定の用紙）
2. 推薦書（所定の用紙）
3. 学会名及び発表要旨（所定の用紙）
4. 申請者の研究業績リスト（必ず添付して下さい）

A 4 サイズで形式は自由。

5. 学会又はシンポジウムでの発表を証明するもの（いずれでも良い）

①申請者氏名記載のプログラム

②申請者の発表を証明する何らかの書類；発表要旨の学会からの受領書または招待状（手紙）など（①あるいは②ともコピーで可。A 4 サイズ）

なお、申請時に資料がまだ手元にない場合はその旨明記し、後日入手次第送付して下さい。

6. 学会の概要を示す資料（サーキュラー、プログラム等）

注：①申請書，推薦書，学会名及び発表要旨，研究業績リスト，については，必ず各々の正本1部とそのコピー3部（合計4部）をお送り下さい。

②申請書（捺印不要），推薦書（捺印不要）と学会名及び発表要旨は，郵送に加えてメールでも事務局宛にお送り下さい。

以上

加藤記念バイオサイエンス研究振興財団

〒194-8533 東京都町田市旭町3-6-6

TEL & FAX： 042-725-2576

事務局長 落合恵子

E-Mail: ben.kato.zaidan@kyowa.co.jp

◆ 会 員 異 動 ◆

新入会・再入会

寺 井 洋 平	226-8501	横浜市緑区長津田町4259 B-21 東京工業大学生命理工学研究科
吉 村 崇	464-8601	名古屋市千種区不老町 名古屋大学大学院生命農学研究科
横 山 哲 郎	321-093	宇都宮市平松本町342-5-107 横山歯科医院
松 原 一 樹		(連絡先自宅のため不掲載)
Moon Son		Hankil Hightechpia, Seoul, Korea
鈴 木 睦 昭	411-8540	静岡県三島市谷田1111 大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 国立遺伝学研究所 知的財産室

連絡先変更

石 山 廣 子		(連絡先自宅のため不掲載)
安 田 武 嗣		(連絡先自宅のため不掲載)
武 田 真	710-0046	倉敷市中央2-20-1 岡山大学資源生物科学研究所
近 藤 勝 彦	243-0034	神奈川県厚木市船子1737 東京農業大学厚木キャンパス農学部農学科 植物遺伝育種学研究室
権 藤 洋 一	305-0074	茨城県つくば市高野台3-1-1 独)理化学研究所バイオリソースセンター 新規変異マウス研究開発チーム
岸 本 妙 子	719-1197	岡山県総社市窪木111番地 岡山県立大学 保健福祉学部 栄養学科

退 会

松木佳奈子, 耳田直純, 有末伸子, 日向康吉, 古賀誠人, 大野清春, 芝池博幸, 田口文緒, 津野憲道, 内堀雅行, 山本喜良, 秋山孝洋, 山形秀夫, Kim Hyung-Cheol, 芦田安代, 平井宏治, 工藤 悟, 佐藤賢一, 鈴木啓太, Bejon Kumar Bhowmick, 肥後廣夫, 井山審也, 李 子東, 千田峰生, 岸井正浩, 佐藤 浩, 藤本明洋, 古川信広, 稲田英里子, 石川裕之, 谷野元彦, 古田喜彦, 天内康人, 種苗管理センター西日本農場, 松井勝弘, 作部保次, 赤沼元気, 徳永一真, 野村直史, 佐藤佑香, 片野仁人, 吉田佐和子, Hamid Sadeghi-Garmaroodi, 種市学佑, 中村淳子, 矢野由希子, 遠藤金吾, 坂井亜紀子, 岩瀬 亮, 加賀美弥生, 大谷基泰

訃 報

KORNBERG, A. (外国人名誉会員) 2007年10月26日に逝去されました。享年89歳
飯 野 徹 雄 (国内名誉会員) 2008年2月22日に逝去されました。享年79歳

謹んで、哀悼の意を捧げます。

寄贈図書・交換図書

科学	Vol. 78 No. 1, 2, 3, 4 (2008)
統計数理	Vol. 55 No. 2 (2008)
MONOGRAPHIAE BOTANICAE	Vol. 97 (2007)
Journal of Applied Genetics	Vol. 48 No. 4 (2007)
JOURNAL OF SHANGHAI UNIVERSITY	Vol. 11 No. 3, 4, 5 (2007)
ChineseJournal of APPLIED & ENVIRONMENTAL BIOLOGY	Vol. 13 No. 6 (2007)
ChineseJournal of APPLIED & ENVIRONMENTAL BIOLOGY	Vol. 14 No. 1 (2008)
JOURNAL OF CHINA-JAPAN FRIENDSHIP HOSPITAL	Vol. 21 No. 5, 6 (2007)
CHINESE QINGHAI JOURNAL OF ANIMAL AND VETERINARY SCIENCES	Vol. 37 No. 6 (2007)
CHINESE QINGHAI JOURNAL OF ANIMAL AND VETERINARY SCIENCES	Vol. 38 No. 1 (2008)
ACTA SOCIETATIS BOTANICORUM POLONIAE	Vol. 76 No. 3 (2007)
THE YEAR BOOK	(2008)

(鈴木真有美)

日本遺伝学会会則

- 第1条 本会は日本遺伝学会と称する。
- 第2条 本会は遺伝に関する研究を奨め、その知識の普及を計ることを目的とする。
- 第3条 本会は事務所を静岡県三島市谷田，国立遺伝学研究所内におく。
- 第4条 本会に入会しようとするものは住所，氏名および職業を明記して本会事務所に申し込むこと。
- 第5条 本会会員は普通会員，機関会員，賛助会員および名誉会員とする。毎年普通会員は会費10,000円（ただし在学証明書またはそれに代わるものを提出したときは6,000円）を，機関会員は15,000円を，賛助会員は1口（20,000円）以上を前納すること。会員で会費滞納1年におよぶものは資格を失うものとする。
- 第6条 本会は次の者を総会の決議により名誉会員とすることができる。
本会に功労のあった者。外国の卓越した遺伝学者。
- 第7条 本会は隔月1回遺伝学雑誌を発行して会員に配布する。
- 第8条 本会は毎年1回大会を開く。大会は総会と講演会とに分け，総会では会務の報告，規則の改正，役員選挙および他の議事を行い講演会では普通会員および名誉会員の研究発表をする。
大会に関する世話は大会委員若干名によって行い，大会委員長は会長が委嘱する。大会は臨時に開くことがある。
- 第9条 本会は各地に談話会をおくことができる。
- 第10条 本会は会長1名，幹事若干名，会計監査2名の役員，および評議員若干名をおく。
1) 会長は本会を代表し，会務を統轄する。
2) 会長は，評議員が全普通会員の中から選出した複数の候補者から普通会員による直接選挙によって選出される。
3) 評議員は，普通会員による直接選挙で選出される。
4) 幹事は，会長が推薦する候補会員を評議員の過半数が承認することにより選任される。
5) 会計監査は，会長が推薦する候補会員を評議員の過半数が承認することにより選任される。
6) 会長は評議員会を招集し，その議長を務める。幹事は評議員会に出席するものとする。
7) 評議員会は，会員を代表して，事業計画，経費の収支，予算・決算，学会誌の発行，大会の開催，その他重要事項について審議し，出席評議員の過半数をもって議決する。
8) 会長ならびに幹事により幹事会を構成し，会長がこれを代表する。
9) 幹事会は，学会の関連事項を論議し評議員会に諮ると共に，会務を執行する。
10) 会計監査は，学会の会計を監査する。
- 第11条 役員および評議員の任期は2カ年とする。会長および評議員は連続三選はできない。
- 第12条 本会の事務年度は暦年による。
- 付則 平成7年10月13日に第5条を改正し，平成8年1月1日から施行する。

<p>Genes & Genetic Systems 第83巻2号（付録） 2008年4月30日発行 非売品 発行者 品川日出夫・斎藤 成也 印刷所 レタープレス株式会社 Letterpress Co., Ltd. Japan 〒739-1752 広島市安佐北区上深川町809-5番地 電話 082 (844) 7500 FAX 082 (844) 7800</p> <hr/> <p>発行所 日本遺伝学会 Genetics Society of Japan 静岡県三島市谷田1111 国立遺伝学研究所内</p>	<p>学会事務取扱 〒411-8540 静岡県三島市谷田・国立遺伝学研究所内 日本遺伝学会 http://www.soc.nii.ac.jp/gsj3/index.html 電話・FAX 055-981-6736 振替口座・00110-7-183404 加入者名・日本遺伝学会</p> <hr/> <p>国内庶務，渉外庶務，会計，企画・集会，将来計画，編集などに関する事務上のお問い合わせは，各担当幹事あてご連絡下さい。 乱丁，落丁はお取替えます。</p>
---	---